

シトリックス・システムズ・ジャパン

リモートアクセス切り口にミドルウェアを販売

シトリックス・システムズ・ジャパンが、ADSLなどのブロードバンド回線やワイヤレス通信と組み合わせたリモートアクセスを切り口に次世代サーバーベースコンピューティングソリューションに注力している。業務ソフトベンダーと提携し販売力の強化を狙う。

ADSL、CATVインターネットなどのブロードバンド回線、携帯電話インターネットの普及に伴い、社外からインターネットを経由して社内システムにリモートアクセスを行う企業が増えてきている。

社員の生産性向上、業務改善を図るため、低価格で高速なブロードバンド回線を活用し、訪問先の行き来、自宅、出張先のホテルなどで仕事ができるように、外出先でもオフィスと同じ情報システム環境を提供しようと考えているからだ。

一方で、インターネットを経由するブロードバンド回線は、セキュリティやパフォーマンス面で工夫が求められるのも確かだ。情報化のメリットがあるにもかかわらず、なかなか踏み込めない企業も少なくない。

ソフトベンダーであるシトリックス・システムズ・ジャパンでは、アプリケーションやデータ処理をサーバーで行い、クライアント側でアプリケーションの操作だけを行うサーバーベースコンピューティング技術に着目。さらにネットワークで通信暗号化を行うことでセキュリティを確保し、通信トラフィックを抑えることでパフォーマンスの高いリモートアクセスソリューションを打ち出している。

では、シトリックスが推し進めるソ

リューションとはどのようなものか。同社のソフト製品を取り上げ、販売戦略を探った。

サーバーベースコンピューティングを実現するミドルウェアが、PC、PDAなど様々な端末から既存のアプリケーションにアクセスできる同社のサーバーソフト「MetaFrame（メタフレーム）XP」である。端末側で入力されるキーボードやマウスなどのデータをサーバーに送信し、その結果の画面データ（ユーザーインターフェース）をクライアント端末に送信。画面データは、差分情報だけに留めており、さらにデータ圧縮なども施すことで、データトラフィックを抑え、ダイヤルアップ回線やPHS回線などのナローバンド回線でも高いパフォーマンスを維持している。

そのコア技術が、ユーザーインターフェースのやり取りを行う、同社が独自に開発したプロトコル「ICA（Independent Computing Architecture）」である。

さらに、今年夏にはMicrosoft Windows Server2003に対応した次期版をリリースする予定である。これにより、.NETのフレームワークに対応したサーバーアプリケーションとの連動も容易に行えるようになっている。



シトリックス・システムズ・ジャパンの竹内裕治
シニアプロダクトマーケティングマネージャー

Webとの組み合わせでも効果

シトリックスの製品戦略として、①モバイル対応、②Webアプリケーションとの連携、③セキュリティ対応を取り上げた。

インターネットの普及でトレンドになっているWebコンピューティングも、サーバー側で処理をするという点では、一見MetaFrameXPと競合するように思われるが、シトリックスの竹内裕治シニアプロダクトマーケティングマネージャーは、「一般的に、Webベースのシステムでは端末側にアプリケーションソフトをインストールしなくて済むため、運用コストが抑えられるといわれている。

しかし、実際のところ、ブラウザーソフトはバージョンやメーカーの違いによって正しく表示されないことや、プラグインのインストールなど、結局はクライアント端末の管理コストが発生している。

MetaFrameXPとWebアプリケーションとを組み合わせれば、端末ソフトの管理から完全に解放され、しかもICAプロトコルによって通信トラフィックも抑えられパフォーマンスも改善できる」と話している。同社では、「NFuse」というMetaFrame

XPのコンポーネントがあり、端末側ではWebブラウザーを活用したシステムにも容易に対応可能だ。

もう1つ、注力しているのが、定額制PHSサービスと組み合わせたモバイルソリューションである。機密性の高いデータを外部に持ち出さずに利用できることから、モバイルとの相性が高い。また、DDIポケットの「AirH」、NTTドコモの「@FreeD」など、月額定額制のPHSデータ通信サービスが登場しており、オンラインで使うことが前提のMetaFrameにとっては最適なネットワーク環境が整いつつあるといえよう。竹内マネージャーは、「PDAなど様々な端末から既存のアプリケーションに容易にアクセスできる点を訴求し、営業支援システム用途を中心に販売していく」という。

インターネット経由でリモートアクセスを行う場合、最も注意しなければならないのがセキュリティ対策。同社では、MetaFrameXPのコンポーネントソフト「Secure Gateway（セ

キュアゲートウェイ）」とファイアウォールとを組み合わせた強固なセキュリティを実現している。セキュアゲートウェイは、SSL/TLSによる通信暗号化機能に加え、さまざまなユーザー認証にも対応。

さらに、最新のバージョンでは、スマートカードやバイオメトリクスによる認証も可能。次期版では2重のDMZ（ファイアウォールの非武装地帯）を配備した環境にも適用可能になるなど、ますます高まるセキュリティ要件に素早く対応している。

古いパソコンでも十分稼働

では、MetaFrameXPはどのような分野で伸びているのだろうか。

現在、最も伸びているのが官公庁や全国地方自治体、学校など教育機関での導入である。地方自治体の情報システムは、パソコンのバージョンが古いものから新しいものまで混在したケースが多く、どの端末でも利用できるアプリケーションでなければならないというニーズが高

い。MetaFrameXPは、負荷の少ないプロトコルを用いるため古い機種でも十分動き、既存のアプリケーションがそのまま使えるので、新たなユーザー教育が不要な点で、評価されているという。

次の販売戦略としてシトリックスでは大企業ユーザー、特定業務用途への浸透を進めていく考えだ。現在、TOPIX100にリストアップされている大手企業のうち、70社がMetaFrameXPを導入しているのだが、企業ユーザーの中には一部の部署でしか使っていないというケースも少なくない。

そこで、モバイルソリューションやWebコンピューティングとの連携などを活用し新しい使い方を提案し、利用を促進していくという。

また、特定業種、業務に絞ったパーティカルインダストリーソリューションも検討しているという。例えば、業務ソフトベンダーと提携することで売り上げ拡大を図るというもの。現在、大塚商会が統合管理ソフト「Smile α」と組み合わせて販売したり、オービックビジネスコンサルタント(OBC)が「勘定奉行」とのバンドル版を発売するなどパートナー提携を展開。さらに、特定業界、業種に強いソフトベンダーとパートナー提携を行うことで、市場を開拓していくという。

竹内マネージャーは、「ブロードバンド回線や定額制PHSの普及によりますますMetaFrameXPを使う環境が整ってきた。運用コスト削減効果やセキュリティの高さを武器に、多くの企業に販売していきたい」と話

図 MetaFrameXPを活用した企業システム

